

<祈りと震災> (39) 流した涙いつか力に

2015年05月02日 土曜日



阪神大震災で家族を亡くした門徒の話に耳を傾ける鍋島さん(左)。東日本大震災の遺族とも対話を重ねる＝神戸市

東日本大震災で掛け替えのない人を失った人々に送るのは、800年前に紡がれた親鸞からの「伝言」だ。

神戸市の僧侶鍋島直樹さん(56)は震災1カ月後の2011年4月、被災した宮城県の沿岸に向かった。B6判の小冊子「死別の悲しみと生きる」を200部携え、役場職員の承諾を得ながら遺体安置所で遺族らに渡した。

「悲しい時は涙を抑えなくてよく、時には悲しむ心を休ませる。そして、確かな心のよりどころができると徐々に乗り越えていく」

鍋島さんが思う普遍的な心の持ちようを01年にまとめた小冊子。つづった言葉は鎌倉時代に浄土真宗を開いた親鸞の口伝などに基づく。

南三陸町では小冊子を読んだ役場職員に頼まれて追悼法要を営んだ。縁は続く。町防災対策庁舎で犠牲となった職員の遺族らと共に泣き、たわいない会話で心をほぐした。

「気持ちのよりどころを見つけ、傷が癒えるようになるには時間が必要だろう」

鍋島さんが被災地での活動に力を注ぐのは、1995年1月17日の阪神大震災で味わった無力感が根底にある。

震度7の揺れが神戸を襲い、6434人の犠牲をもたらした。宗教が果たす役割を問い直す契機になった。

「大切な人と突然別れた人に語れる言葉がなかった」。苦い記憶をかみしめる。

木造家屋が次々倒壊し、住民は着の身着のまま体育館などに逃げ込んだ。誰もがつらい事情を抱える中、家族を亡くした人は私的な感情を胸の内に抑え込んでいた。

宗教者に何ができるか。浄土真宗系の龍谷大(京都市)教授でもある鍋島さん。死別に苦しむ遺族と接する僧侶のあるべき姿勢を研究した。たどり着いた答えは傷心乗り越える親鸞の言葉だった。

鍋島さんはことし4月中旬、神戸市の潮海裕子さん(74)宅を訪ねた。阪神大震災で木造の自宅が崩れ、義父母が命を落とした門徒だ。

時がたち、潮海さんは暮らしの落ち着きを取り戻した。非業の死に沈んだ心も穏やかになったように思う。

7年前に孫が生まれた。成長する姿を見るにつれ、亡き人への新たな後悔が募る。「義父母は孫の成長を喜んでいて。もっと息子の学校の話をしてあげれば良かった」。感情は揺れ動く。

鍋島さんが胸中を察する。

「死別の痛みは時間とともに消えると言うが、実際は終わらない。それは悪いことではなく、いつしか優しさや生きる力に転換されていく」

阪神を機に培った僧侶の精神性を胸に、20年後の東北の被災地に立つ。寄り添うことの難しさ、そして大切さは遺族が教えてくれる。

阪神大震災と地下鉄サリン事件が起き、自殺者が増加に向かい始めた1995年は宗教者の存在が問われた年だった。東日本大震災で被災者の心に向き合おうとする宗教者たち。自らの使命を探った20年の軌跡をたどる。

「祈りと震災」取材班＝報道部・沼田雅佳、村上俊、柏葉竜、鈴木拓也、写真部・岩野一英、伊深剛